資料５

# 小田原市総合計画審議会（第9回） 議事概要

令和3年11月11日（木）
10:00～12:00

＜配布資料について事務局より説明：企画政策課長＞

- 本日の審議にあたり、審議でいただいたご意見の内容と、それに対する現時点での市の考え方を参考資料1（第4回～7 回）、参考資料1－1（第8回）としてまとめた。
- 参考資料2は、参考資料1、1－1にあるご意見のうち、市の考え方を再検討するとしていた部分を抽出し、主要な論点として、「目標値の設定」、「人口シナリオ・移住定住施策」、「産業分野」、「環境・エネルギー分野」、「推進エンジン」の5項目に整理したもの。
- それぞれのご意見の文頭にある数値（401、402 等）は参考資料1、1－1にある「CDNo.」とリンクしている。

**◇目標値の設定**

- 指標の考え方や根拠を資料として審議会にも示したが、計画書にも表していくことを検討している。
- 目標を階層構造で示すべきとのご意見について、「生活の質の向上」、「地域経済の好循環」、「豊かな環境の継承」のそれぞれに目標値をおき、詳細施策の目標との関連性が見えるような形で示したいと考えている。
- 定性的な目標についても設定根拠を示し、成果が測定可能な指標があれば、そのような指標の組み合わせにより目標を測ることができる形を検討している。
- 詳細施策の指標に対するご意見の説明は省略する。

**◇人口シナリオ・移住定住施策**

- 移住定住に関する施策を計画体系に明示した方が良いのではないかとのご意見に対して、重点施策の人口シナリオで、人口増に対応する施策群を示す、あるいは推進エンジンの行政経営の詳細施策として新たに項目立てをすることの検討を進めている。

**◇産業分野**

- 産業政策のビジョンや大きな考え方については、一次答申でいただいたご意見を反映し、基本構想の「地域経済の好循環」を修正しており、基本構想において主旨を反映したいと考えている。
- 「施策12　働く場・働き方」及びその詳細施策については、ご意見を踏まえて具体的な記述について検討する。

**◇環境・エネルギー分野**

- 「施策20　循環共生」について、この用語が一般的ではなく、また、ここにあるごみ関連の詳細

施策である、「詳細施策2　ごみの減量化・資源化の推進」、「詳細施策3　ごみの適正管理」と「施策21　自然共生・環境保全」の「詳細施策4　美化の推進と衛生環境の保持」を一つの施策にまとめた方が良いのではとご意見をいただいた。これについて、ご意見を全面的に反映する形で施策の組み立て直しを考えている。

**◇推進エンジン**

- 推進エンジンである「行政経営」、「公民連携・若者女性活躍」、「デジタルまちづくり」の3項目は、別々の項目立てすることに違和感があるというご意見、デジタルは行政経営の全てに関連するため、一体的に考えるべきとご意見をいただいた。ご意見のとおり、推進エンジン3項目は、全施策に関連し、3項目の間でも相互に関連するという認識に立っている。しかし、関連性を計画書の全てに記載すると、計画の構成や記述が複雑になるため、行政案の体型化とした。3項目は、その他の25の施策と位置付けが異なることが分かるような表記を検討している。

**【これまでの審議会における論点について】**

- 答申のレベル感、答申に盛り込む内容を確認させていただきたい。参考資料 2 は答申の本文でなくてもいいが、別添や別紙として答申とセットで盛り込んでいただきたい。全体の共通認識として、答申のイメージを明確化してほしい。（奥委員）
  →目標設定の考え方、検証の考え方のレベルでは盛り込んでいただく予定であるが、それぞれの目標値に関する内容は細かすぎると考えている。今回論点として出させていただいた全体的な考え方を示す部分は盛り込んでいただく予定。（企画部長）

- これまでの審議は行政案を基に議論を進めており、答申としては行政案に対するご意見となると考えている。最終的な答申の出し方について再度確認したいが、中には、審議会で計画の審議会（案）をまとめ、その案を答申として示す場合もある。今回は、行政案に対しての改善事項や修正方針に関するご意見を答申として提出し、行政はその答申をもって、行政案を修正する流れと認識しているが、この認識で良いか。（出石会長）
  →行政案に対する、改善や修正方針に関するご意見を答申として提出いただきたい。答申の書式については、実行計画全体のご意見をいただき、加えて個別の内容に関して、箇条書き形式で記されるのではないかと想定している。（企画部長）

- 答申書自体に、細かく一つ一つの内容を盛り込めないにしても、これまでに出されたご意見を別添として盛り込むことはできるか。（奥委員）
  →別添になるかどうかは別として、個別の様々なご意見について、答申に盛り込んでいただいて構わないと考えている。（企画部長）

- 参考資料2の説明では、示されている論点に対して、口頭で市の対応方針が説明された。口頭

でお話しいただいた部分が答申に書き込まれるという理解で良いのか。（平井委員）
→現時点での市の考え方は答申には盛り込まれない。整理した論点部分が答申の内容になっていくのではないかと考えている。（企画政策課長）

- 産業分野ついて、先ほどの説明の中では、産業の新たな概念に関して、基本構想を修正するという話があった。基本構想へは既に一次答申をしているが、基本構想の修正についてはどのように考えているか。（出石会長）
→一次答申において、基本構想に関する様々なご意見をいただいており、それを基に基本構想に加筆・修正を加えている。12月定例会に議案として上程させていただく予定のため、この場ではお示しできなかったが、第10回会議に修正後の基本構想をお示しさせていただく。（企画部長）

- 参考資料2の P8、【取組の視点（働く場・働き方）】の「98＿6－11」については重要なご意見である。新しい働き方の中身、産業そのものの考え方についてのご意見は答申に盛り込んでいただきたい。（奥委員）
→執行部としても、指摘いただいているご意見内容を踏まえ、計画にはいただいたご意見の内容をしっかり反映していきたいと考えている。（経済部長）

- エンジンとその他の部分ではレベルやトーンが違うので、その他の25施策とは違った見せ方をぜひしてほしい。参考資料1の No.10では「それぞれ推進本部を立ち上げて、全庁を挙げて取り組んでいます。」と回答があるが、推進本部は立ち上げた後が問題。過去に携わった事例では、新たに立ち上げた組織で実施する施策と、それまでの組織が進めていた部分で進め方や考え方、技術が一致せずに何も進まないことがあった。例えば、デジタル化も、推進本部に別の次元のデジタル化があるのではなく、従来の施策である教育や、経済、都市開発、防災、環境など全ての部分に関連することを認識したうえで各部局が事業を推進しないと、行政経営にならない。単に組織や本部、目標値を作って終わりではなく、どう評価するのかが重要。1つの部局でデジタル化を進めるだけでは良くない。一個上の部分で全体をコントロールできる体制を構築しないといけない。（信時委員）
→ご意見は答申に盛り込む。形だけでなく、中身が動かないと意味がない。この内容は言葉にするしかない。一次答申に盛り込むべきことだったかもしれないが、実際に総合計画を動かす中心は職員。職員に認識を持ってもらうような表現を答申に盛り込む。（出石会長）
→執行部としても問題ない。盛り込んでいただいて構わない。（企画部長）

- デジタル化推進のために、市外の会社を使うことが想定されるが、できれば小田原で開発し、市外に販売できるようになると良い。推進エンジンは、幅広く謳っても良いと思うが、民間事業者からすると、多少分野を絞った方が投資先として選びやすい。また、市内の企業も、市が目指している方向性に合わせて動きやすいのではないか。（ジェフリー委員）

- 目標値の設定に戻るが、【検証の考え方】の「6＿6－01」において、「国施策に連動した施策の練り直しを進める」となっているが、参考資料1や1－1で示されている市の考え方を見ると、「国の方向性が出るのを待ち、それを検討してから市が実施する」という受け身の体制になっていることが伺える。ある程度、国で方向性が示されているものは先取りして踏み出す必要があるのではないか。総合計画策定の途中で出てくる施策も随時キャッチアップを計っていただきたい。また【検証の考え方】について、もう少し補足していただきたい。（平井委員）
  →計画の基本的なスタンスは、時代の変化が激しい中でも的確に対応できるものであり、3年スパンで実行計画を回す。実行計画では目標値を設定し、進捗を測りながら中身を機動的に動かす方針でいる。
  ：計画の検証方法は、総合計画審議会の位置付けと共に考えていきたい。また推進エンジンは非常に重要な部分であり、信時委員からも、推進エンジンがどのように全庁的に機能するのか、どのように測るのかについてご意見をいただいたが、まだ方向性が明確な方針が決まっていないため、今後検討していきたい。（企画政策課副課長）

- まち・ひと・しごと創生総合戦略との関係について、これも、国が考え方をつくり、県がつくり、市がつくるという動きになっている。総合計画と似ているが計画と戦略では時期が違う。総合計画との影響はどうなっているのか。（出石会長）
  →まち・ひと・しごと創生総合戦略や、SDGs未来都市計画との関係について、総合計画に合わせて見直しをしていきたいと考えている。また、それぞれに進捗管理があり、どのように整理をするのかは検討事項だが、指標を合わせるという選択も考えている。総合戦略、未来都市計画それぞれの命題を踏まえながら進めていく。（企画政策課副課長）

- 企画政策課はそう考えているかもしれないが、個別意見ではそういった姿勢が見えてこない。もう少しアンテナを張って、先取り的にやっていくとことが求められるではないか。（平井委員）

【市長、副市長との意見交換を含めた計画全体の審議】

- 先日、三の丸ホールで実施された、民生委員児童委員協議会の全体研修会で市長の講演を聴いた。まさにテーマは「世界が憧れるまち“小田原”」。住み慣れてしまうと忘れがちになっている、小田原の素晴らしい地域資源、歴史や文化、自然環境や食などを改めて実感することができた。
  ：一方で、小田原は交通の便が良いというイメージがあるが、観光地への通過点のイメージも強い。基本構想でも、市民力や地域力は小田原の財産であるとしている。小田原に住み続ける住民がまちに誇りや愛着を感じ、小田原への想いがまちの魅力として発信されることが期待されると感じた。デジタル化は、あくまでも一人ひとりが守られるような優しい社会実現のために進めてほしい。誰にとっても明るく、居心地の良いまちであってほしい。（有賀委員）

- 計画を示す時に大事なのは、市民の方々が計画を理解して、市がどんな方向に向かうかを分

かっていただくこと。現状、読んでいても興味が引かれない。審議会を通じて、推進エンジンが全体に関する内容であると理解できたが、市民に伝えるときは表や図、イラストが必要。2030ロードマップのような表現があれば良い。伝わる表現をしていただきたい。（益田委員）

→理解をしていただかないと元も子もない。計画書を編集する段階で視覚的も分かりやすく、図や写真、グラフなど様々な工夫をしていきたい。（企画部長）

- 計画が市民と共有されない、分かってもらえないと意味がない。自身が市長をしていた際は、コンセプトを分かりやすくした動画を作成した。総花的にすべてを伝えるのではなく、なにか一つでも持って帰ってもらうという気持ちが大事。その一つが推進エンジン。推進エンジンをどのように分かりやすく伝えるのかを工夫してほしい。（﨑田委員）

→伝える力、伝え方については、おっしゃる通り。市長に就任して1年半。行政の考え方や考えていることを市民と共有することの大切さと、その難しさを痛感している。

：行政からすると、自分たちで分かっているので、そのつもりで話をすると一方通行になりがち。計画を作って終わりではなく、どのように計画を進めていくのか、どうやって市民と共有するかが重要。

：審議会でのご意見を踏まえて、小学生、中学生から絵画や100文字作文を募集している。計画を一緒に作る、共感を得ながら作り、一緒になって進めていく。例で挙げていただいた動画も大事な手法。いろんな手法を駆使しながら伝えていきたい。（市長）

- 「総合計画の策定や総合計画の推進は企画部の仕事」という認識ではなく、各部局の方々も自分事となるように工夫して欲しい。（信時委員）

- 実際に実施してみて効果が高かったアイデアの共有。日南市の総合計画のコンセプトは10代で80％の認知率を持っている。背景として、高校生に総合計画のコンセプトを学習してもらい、年度末に市長に対して政策提言をしてもらった。自分たちならどうするかと考えてもらう。また、ステッカーを作って、タクシー等に貼ってもらった。（﨑田委員）

- どうしても行政職員は固定観念になりがち。固定観念をもっていない方からご意見をいただいたらどうか。例えば今回の審議会に市民委員として市民が入っていただいているので、提言やアピール、周知の仕方について提案いただくのはどうか。せっかく闊達なご意見が出ている審議会なので、市民委員からご意見をいただく等しては良いのではないか。（出石会長）

- 審議会に参加させていただき、議論をして考えていくうえで、小田原は素晴らしい地域であるということが分かった。加えて、計画推進を丁寧に実施することで、もう一つ上のレベルに行けるのではないか。市民や市外への浸透、ブランディング、発信もプラスで実施していただきたい。若い人、子どもたちが、将来住む場所を小田原にすると思えるようになると良い。（遠藤委員）

- 「世界が憧れるまち“小田原”」について、海外から見た際に小田原のどんな部分に注目してほしいと考えているか。（ジェフリー委員）
  →「世界が憧れるまち“小田原”」について、何故この言葉を思いついたのか。都市づくりに携わる中で、国内外の都市を見てきた。小田原には、世界が憧れる要素は全て揃っていると感じているが、まだまだ成長していく過程だと思う。
  ：例えばどんなまちなのかと聞かれる。また、様々な機関が住みたい街ランキング等を実施している。重要なのは都市ブランディング。都市ブランディングは、様々な要素をそぎ落とすことによってできるもの。小田原の魅力の出し方。世界から憧れてもらうために、住んでいる人がまちに誇りを持ち、住み続けたいと思ってもらうことがベースにあり、そこで暮らしている人々の生活を見て、機会があれば住んでみたいと思え、小田原から飛びたった方も小田原を忘れることなく、日本中、世界中で小田原の良さを発信していただけるようなまちにしていきたいというものが全体像。具体的にどのようにエッジを効かせるかということはこれからの課題。（市長）

- 以前、市長に直接インタビューさせていただく経験もあり、「世界が憧れるまち“小田原”」について話を伺うことがあった、また今回、市民委員として審議会に参加することで、行政というものがどういった考えを元に行われているのかを感じた。想像するだけだったものが、実態として感じることが出来る良い経験だった。これから、小田原出身者として社会に出ていく身だが、今回感じた事を念頭に置いていきたい。（佐藤委員）

- 市外の方に小田原市にどんな特色があるかを知ってもらうより、住んでいる人がどう小田原の事を思っているかが重要。先ほども話があったが、企画部からは熱を感じるが、個々の所管までその熱が落ちていない。デジタルや公民連携の視点があまり盛り込まれていない。市民を思って取り組んでいるという熱が市民に伝われば、「市役所も汗をかいてくれている」と伝わる。言葉でなく行動に表れるようなプランができると小田原は変わったと思える。

：また、様々なことをするのには財政が必要。市の税金だけでは国や県の補助金等の情報を、アンテナを高くしてキャッチして、市にあった形で料理することが大事。絶えず市のためにどうするかを考えて動いてもらえればありがたい。（木村（元）委員）
  →まちに住む人が楽しいと思えたり、ワクワク感がないと次の段階に進まない。また、その部分については市の職員にも認識がないと進まない。
  ：お金の話があったが、国の様々な施策についてしっかりと早めに情報をとっていく。小田原の場合、国の省庁からの出向職員がいる。表だってPRすることではないが、そういった考え方を持った職員は一定数いる。そのこと自体をPRするのではなく、淡々とやっていく。国や県の情報を早くキャッチし、逆に、市の情報や考えを国や県にうまく提示していくことが好循環になる。私共もしっかりと対応していく。（鳥海副市長）

- コロナの収束がだいぶ見えてきており、世の中の価値観が相当変わると考えている。デジタル庁が誕生し、行政窓口でのオンライン化、データ集積、オープンデータ化が始まり、今までの

市役所とは全く違う行政のマネジメントが始まってくると思う。今回コロナ後を見据えた最初の総合計画。全体的によく書き込まれてはいるが、バックキャストの視点で、一番重要な市長の思い、「ここだけは絶対やる」というところ、市民に対してもここが重要だと分かるようにしていただきたい。総合計画なので全て重要だが、この10年で一番重要なのは行政改革と経済政策。その部分をもうちょっと強調して、「どんなに批判があってもやっていく」くらいの気持ちがないと、この変革の時を乗り切れない。（関委員）

→コロナを踏まえて、2030年をどう描いていくかは、総合計画の大きなテーマ。その作りもバックキャストであり、昨年度策定した 2030 ロードマップも、バックキャストの考え方を取り入れている。シンプルにして、目標だけは明確なビジョン。2030年の姿は普遍の価値とし、やり方は臨機応変に見直していく形を取らないといけない。市役所がどういう組織になるのか、新しい働き方、新しい市役所という言葉が、今後どんな社会像になるのか。本市にいる2300人が、全員同じ方向に進んでいるかと問われると、そこは真摯に足元を見なければいけない。

：市の職員が、職員だけでしかできないことは何かをきちんと認識をしないと、総合計画は絵に描いた餅になる。行政サービスの向こうには常に市民がいて、そのサービスの受け手、パートナーである市民が今どういう状況下にあるのかを考えなければならない。そのためには対話を続けることが何よりも重要。総合計画は来年度からスタートするが、常に内部の振り返りをする機会を作らなければならない。

：先行して進めている2030ロードマップの4つの先導領域「医療・福祉」、「教育」、「企業誘致」「環境・エネルギー」は、「世界が憧れるまち“小田原”」を作る上で絶対に外せない領域。それがきちんと市民と共有できるビジョンにしていかなければならない。（市長）

- 市民との対話の一つとして、市民アンケートを実施した。結果を内部でも読み込み、今後に生かしていただきたい。気になった点として、「歴史文化を生かすこと」や「市民活動」の満足度が高いが、重要度はそれほど高くないこと。また、居住歴1年の方は非常に満足度が高いが、5年ぐらい経つと急激に下がる。この原因に安心の要素があるとすると、市民の暮らしを守る視点が非常に重要なポイントになる。

：転居志向が高い方の不満点として「娯楽や余暇を楽しむ場が少ない」ことが挙げられている。一方で、30代40代は、市と協働することに関して他の年代よりも10％以上を高く、前向きな意向がある。「市民活動」や「歴史文化を生かす」ということに対してボランティアのニュアンスが強いが、市民が市と一緒になって協働することにワクワク感を持ち、娯楽や余暇として捉えてもらう場づくりも必要ではないか。これが実現すると、娯楽や余暇がないから引っ越したいという若い世代の気持ちもカバーでき、市民活動や歴史文化の重要度の判断は変化する。この流れを活かして「世界が憧れるまち“小田原”」を実現していくことで、未来志向のまちの方向性になるのではないか。今回の総合計画をきっかけに、市民の皆さんのモヤモヤ感を細かく見ていただき、パーツとパーツを繋ぎなおすことで一気に動き出すことを期待する。（平井委員）

→アンケート項目を見た時、設問が多いと回答率が下がると心配していたが、予想に反して

多くの方に回答していただいた。今年のアンケートの目的は総合計画策定だが、政策の進捗管理ツールとして、これからも積極的に取り入れていきたい。

：小田原は市民活動が活発化しており、これは小田原市の特性・特徴であると胸を張って言えるが、楽しくないと続かない。頑張らないといけないという義務感になると下向きになっていく。後世につなげていくために、どうやって参加する意欲を作るかは大切な視点。

：海岸の散歩や、お濠にたたずんで小田原城を眺めるなど、何気ない活動が、見方によれば最高の娯楽や余暇、時間の使い方になるということを、移住者の話を伺うことで実感している。積極的に市民活動が継続できる環境作りに取り組んでいきたい。（市長）

- 参加させていただいて思ったことが、審議会で決める範囲が広く、重要な案件が多いこと。これだけの案件を実施して、発信するとなると相当な見せ方が必要。見せ方が上手くないと実施していないことになってしまい、そこが苦しいところと感じた。

：小田原Ｌエールの取組も素晴らしいし、非常に子育てやすいまちである。特に文句もなく、恵まれている。今あるもので、発信力を強化すれば、良いまちであることは伝わるのではないか。（秋元委員）

- 市が計画を作り、それを地域に下ろしても、事業目的が地域の人たちには伝わらず、市が何を言おうとしたのか、どの方向に地域活動を持っていけば良いのかを考えることが多かった。先に目的を伝えてくれた方が、地域の人は動きやすい。

：私には届かなかったが、夫にはアンケートが届き回答した。回答のために考えていると、小さい頃の小田原の良さが見えてきた。年を取ると、現在のことより昔の小田原に対してとても愛着が湧いてくる。小田原にちなんだ童謡や、お話がたくさんある。今の子どもたちに、こういったことを伝えていきたい。市民にも分かりやすく伝達できるようしてほしい。（鈴木委員）

→行政は目の前の仕事をやることで、市民の皆さまの幸せや、暮らしやすさ、便利さのために努力しているが、それがどのように伝わるのか、本当に市民の役に立っているのかを考えないと一方的になってしまう。目的や、その仕事の必要性、何故、市民の方と一緒にやらなければならないのかということを、しっかり伝えながらやってきているつもりだが、伝わっていない部分もある。行政側も努力していくので、引き続きよろしくお願いしたい。（玉木副市長）

- 公務員を志望している身として、この会議や行政が、市民のことを思い、市のために動いていることを実感した。計画を実行していく上で、様々な壁や問題があると思うが、市民の力を借りてほしい。市民に声をかけて、手をとって共に作ることが市の理想。アンケート結果などを見ても、小田原ではそれが可能だと思う。自分もその一員となれれば嬉しい。（矢部委員）

- 行政案は非常によく作られていると思った。作られてくるプロセスで、非常に苦労されていると感じた。市民の多くは、自分が住むまちが住みやすいということを外で話す機会はない。発信するのは市の役割。市が積極的に発信していただけるとありがたいと思う。

：デジタル庁ができたが、国も方針が明確に決まっているわけではない。小田原市だけではなく、基礎自治体は、国の決定をいつまで待てばいいのか困っているではないか。待つよりも、国と話をするとか、先取りできるところは、基礎自治体で進めていくことがあるべき姿と思っている。日本は約1700の自治体が、同じ法律に基づく手続きを実行するために1700種のシステムを個別で作っている。それを一つのシステムにしようとするのがデジタル庁の動き。逆に言うと1つの自治体が使えるシステムは他の1700の自治体も使えるものである。できるだけ早く取り組んでいただきたい。小田原発のシステムができあがって、それを他の自治体が使うというような世界ができてくるとありがたい。（別所委員）

→別所委員のご指摘の通り、日本のデジタル化の歩みの中での大きな反省点が出てきたので国が主導で動いているのではないかと考えている。表裏一体の部分があり、我々が使っているシステムを一体化することで、地域でカスタマイズができなくて、汎用性がなくなる。そのあたりがすごく悩ましい。ご意見のとおり、国の動きをただ待つだけではなく、国の動きを先取り、もしくは小田原から国に提案していくことができれば良い。使いやすいサービスが生まれ、それが横に広がり、そのサービスがアップデートされることで、自然とバージョンアップされてきた。小田原のことを考えながら都市のデジタル化を進めさせていただきたい。（市長）

- 市から市外に発信することについて、面白い事例を紹介する。ある自治体（A 市）が近隣の自治体の喫茶店などに、A 市の作成したコースターを作って配っておいてもらう。つまり宣伝を他都市の喫茶店にしてもらっているとうこと。やられた自治体からは文句が出たそうだが、そのような戦略もあるという事例。（出石会長）

- 計画書を触った瞬間に中身を読みたいと思うか、最初の数ページで意図が伝わるかについて、2030ロードマップを見た時に、潔いぐらいシャープな計画だと感じた。まちがどういう方向を目指していくのかという意識や意欲を明確に感じることができた。しかし、総合計画となると全部局を巻き込んだ内容であるので、若干シャープさが落ちていると思った。行政案にはイラストや写真、図表がない。まだこれから作り込んでいくと思うが、素晴らしいものを作っていただきたい。市民に対するアプローチ、外部者にアプローチするという視点を盛り込んでほしい。

：スーパーシティは、都市OSをつくり、その上に都市機能やサービスなどのレイヤーを重ねて、実際のデータを活用していく取組。以前、規制について話したが、規制は昔のニーズに沿ってできており、それを変えていく人がいなかった。既存の枠組みで物事を考えていこうとすると、新しい政策はなかなか出てきづらい。デジタル化に限らず、そのような視点を入れていただきたい。ただ、規制は住民サービスの向上を目的に行うもの。順番を間違えないで実施していただきたい。（藤澤委員）

- 先ほど行政職員の話が出ていたが、10数年前の職員と今の職員を比べると全然違う。昔は威張っていた印象だが、今は誰と会っても挨拶するし、楽しい役所だと思っている。

：様々な委員会や会議に出てきたが、市民になかなか思いが伝わらないことは経験してきた。周囲にどのように伝えるのかということは、私も地域の一人の住民として常々思っている。伝え方は行政側としても、受け手の市民も大変だと思う。

：住民の満足度について、自治会やまちづくりなど、やっている人は満足しているが、他の人に伝わらず、役の担い手がいない。

：今回の総合計画は、3年で見直していくとのこと。一度に全部ができるとは思っていない。3年経って反省をして、また次のステップに進んでいく形で、市民の皆さんにも分かる、市民も納得するような小田原市になってほしい。（木村副会長）

- 審議会において、十分な役割を果たせなかったと感じているが、医療者として自身の役割は、市民が安心して健康に暮らせ、人生を全うできる小田原を実現させることが叶うことと自負している。施設としては小田原市立病院があり、新病院建設という構想があるが、それだけでなく、医療者一人ひとりが全体でタッグを組み、総合計画に書かれていない内容を含めて、連携してまちづくりを進めていくことが重要。（渡邊委員）

  →小田原にとってありがたいことは、医師会をはじめ、医療資源が揃っていること。コロナワクチンの接種でも、医師会には献身的に協力いただいた。市立病院には、地域医療連携機能を設け、医師会はじめ、地域の医療機関と連携して、地域が全体で医療ニーズに応えることを目指している。24時間365日、救急をしっかり支えること、ニーズに応えていきたい。（玉木副市長）

- 総合計画はあくまでも手段であって作ることが目的ではない。しかし、名前の通り、総合的な市政運営のためには必要なもの。総合計画に従って予算立てされていくなど、行政にとってはバイブルとなる。しかし、市民が総合計画の全てを知ることはありえない。「世界が憧れるまち“小田原”」だけでも覚えてもらえれば十分である。市民に対して「総合計画に記載がある」ということを大義名分にして事業を行うのではなく、丁寧に説明して、市民参画を図って協働で進めていただきたい。

：若者女性活躍については、この審議会でも議論になった。気になるのは女性活躍。本日、全部局長が参加しているが、女性は2人。圧倒的に少ない。男女の人口割合は五分五分。「隗より始めよ」ではないが、総合計画に掲げる以上、まずは小田原市で女性が幹部として活躍できることを期待したい。（出石会長）

【市長より】

- 改めて、お忙しい中、熱心に議論いただいたことに心から感謝申し上げる。
- 冒頭に、話をさせていただいて以降、一次答申をいただき、皆様方の議論については職員から適宜伺っている。
- 今回の総合計画は、これだけのボリュームを、短期間でできるのかを当初戸惑っていたが、計画に時間をかけるより、動き出すスピード感を大切にするため、タイトな日程の中、オンライン機能も活用しながら参加していただいたことも、今回の審議会の特徴の一つ。また、会議の模

様を生配信しており、開かれた市政を象徴する会議だと考えている。

- このような議論が行われているということ自身を、大きな糧とし、いただいたご意見をしっかり踏まえて、しっかりとした形にして計画をスタートしていく。
- 重要なのが、どうやって市民に分かりやすく伝えるか。そして市民との関係性を一つ上のステージに上げないといけない。行政側も、もう一歩踏み込む気持ちで。場合によっては、押し付けがましいという印象のため、職員によっては、気後れするかもしれないが、市民との関係性、距離感が近くなっていけば、もっと本音でコミュニケーションができていくのではないか。
- ぜひこれからも様々な形で皆さまからご指導いただきたいと思う。